

運動系部活動経験者における養護教諭の役割についての一考察

石川 拓次

要旨

本研究の目的は、高校運動系部活動における養護教諭の役割について考察することである。対象は、高校時代に運動系部活動を経験した大学生および現在、高校で運動系部活動を行っている男子高校生 77 名であった。本調査用に独自に作成した質問紙調査用紙を用いて、調査を行った。個人情報として、性別、身長、体重、出身高校、高校時部活動、大会成績および過去のスポーツ歴を調査した。また、運動器疾患調査として、高校時代に 1 週間以上練習を中止した運動器疾患についての調査を行った。調査項目は、発症時期、受傷部位、疾患内容、疾患発生状況、疾患発生場面、練習中止期間であった。そして、脳震盪経験の有無、受傷時の通院状況、通院場所、相談相手、受傷時もしくは相談時の養護教諭との関わりについて調査を行った。高校の運動系部活動において約 70%の部員が 1 週間以上練習を中止した運動器疾患を経験していた。運動器疾患についての相談者は、部活動の顧問が最も多く、次いで、学外のアスレティックトレーナー、部員（先輩・同級生）となり、養護教諭との回答は少なかった。養護教諭に相談しなかった理由として、保健室に行くことがなかったから、養護教諭は部活に関わりがないと思ったから、養護教諭よりも相談するのに適任だと思った人がいたからなどが挙げられた。運動系部活動における養護教諭の役割は未だ不明な点が多いが、運動器疾患予防の観点からも早急な対応が求められる。

キーワード：養護教諭，運動系部活動，運動器疾患，予防

1. はじめに

運動部活動は、学校教育活動の一環として、スポーツに興味と関心を持つ同好の児童生徒が、自発的・自主的にスポーツを行うものであり、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、学校生活に豊かさをもたらす意義を有している¹⁾。運動部活動は、自主的に自分の好きな運動に参加することにより、体育の授業に加えて、スポーツに生涯親しむ能力や態度を育てる効果を有しており、あわせて、体力の向上や健康の増進を一層図るものである。

しかし、一方で、昨今運動系部活動には以下に示す問題点も指摘されている。その一つは、教員の多忙さの一要因である。国際教員指導環境調査 (TALIS) によると、教員の 1 週間当たりの勤務時間は調査国の中で最長であり、授業時間は参加国平均と同程度であるが、課外活動 (スポーツ・文化活動) の指導時間が特に長く、事務業務、授業の計画・準備時間も長いとされている²⁾。

次にあげられるのが勝利至上主義である。学校教育の一環である運動系部活動においても、小学校から全国規模の大会は開催されており、中学、高校に至っては、マスメディアでも取り上げられることが多く、指導者および選手たちは勝利に異常なまでの執着をみせることもある。

そして、3つ目としては、体罰があげられる。近年起こった運動系部活動での体罰が原因となる自殺問題では、運動系部活動にける負の部分が大きく報じられ、その後も体罰や部内のいじめによる報道も後を絶たない。

最後にスポーツ外傷・障害（運動器疾患）の問題である。学校における部活動において運動器疾患の発生についての調査によると、スポーツ外傷・障害が原因で、1週間以上スポーツ活動を中止したことのある運動部員は、中学生で12.6%、高校生で24.9%と報告されている³⁾。また、日本スポーツ振興センターは、全負傷中、中学校で46.3%、高等学校で53.6%が運動系部活動時に起きていると報告している⁴⁾。このように、部活動による運動器疾患は、多く発生している。

養護教諭の職務の一つに、応急処置があげられるが、特に運動器に関係した外傷・障害の対応処置については、不安を訴えている養護教諭も多い。内尾は、約4割の養護教諭が実際の運動器疾患の罹患状況はわからないとし、児童生徒、保護者および指導者からの相談に苦慮していると回答していると述べている⁵⁾。

このように運動系部活動は、学校教育の一環でありながら、養護教諭の運動器疾患や部活動への参加の意識は低いことが伺われる。しかし、運動器疾患は生涯にわたる健康を害することや部活動における体罰などの問題からも、養護教諭は積極的に運動系部活動へ参加することが望ましいと考える。

そこで本研究では、運動系部活動経験の養護教諭への印象を調査することにより、養護教諭が運動系部活動への関わり方について考察することを目的とした。

2. 目的

本研究の目的は、高校運動系部経験者への質問紙調査から、高校運動系部活動における養護教諭の役割について考察することである。

3. 方法

(1) 対象

高校時代に運動系部活動を経験した男女大学生 46 名（男性 24 名、女性 22 名）および現在、高校で運動系部活動を行っている男子高校生 31 名の

合計 77 名であった。対象には、本研究の目的、方法等について、文書および口頭にて説明をし、承諾を得た。対象の特性を大学生、高校生別に表 1 に示した。大学生 (N=46) の年齢は、 19.9 ± 0.9 歳、高校生 (N=31) の年齢は、 17.1 ± 0.9 歳、そして、全体 (N=77) は、 18.8 ± 1.7 歳であった。また、所属運動系部活動について、表 2 に示した。大学生は、ソフトボール部、硬式野球部、バドミントン部、バレーボール部、卓球部、陸上競技部、テニス部、レスリング部、バスケットボール部、ダンス部、弓道部、空手部などであり、高校生は、ラグビー部であ

(2) 方法

質問紙調査

調査方法は、本調査用に独自に作成した質問紙調査用紙（資料 1）を筆者が担当する講義時間内に直接法にて配布し、その場で回収した。

設問内容および項目については、フェイスシートとして、性別、身長、体重、出身高校、高校時部活動、大会成績および過去のスポーツ歴を調査した。

また、運動器疾患調査として、運動器疾患の有無、脳震盪経験、受傷時の通院の有無、通院場所、相談相手、受傷時もしくは相談時の養護教諭との関わりについて調査した。

そして、養護教諭を相談相手に選ばなかった際には、その理由を尋ねた。設問項目は、①養護教諭は忙しいと思ったから、②保健室に行くことがなかったから、③養護教諭にスポーツでの怪我は相談しづらいと思ったから、④養護教諭は部活動に関わりがないと思ったから、⑤養護教諭よりも相談するのに適任だと思った人がいたから、⑥養護教諭に相談することは考えることがなかったからの 6 項目であった。「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」の 4 件法の単一回答とした。

表 1. 被験者特性

対象者	N	性別		年齢(歳)
		男性	女性	
大学生	46	24	22	19.9 ± 0.9 歳
高校生	31	31	0	17.1 ± 0.9 歳
全体	77	55	22	18.8 ± 1.7 歳

表 2. 所属運動系部活動別人数

所属運動系部活動	人数
ラグビー部	31
硬式野球部	16
ソフトボール部	9
バドミントン部	4
バレー部	4
卓球部	3
陸上競技部	2
テニス部	3
レスリング部	1
バスケットボール部	1
ダンス部	1
弓道部	1
空手部	1
合計	77

4. 結果

(1) 運動器疾患経験

図1に高校運動系部活動時での運動器疾患経験の有無について示した。運動器疾患は、部活動の練習を1週間以上中止したものとした。受傷有は、51件(66.2%)、受傷無は、26件(33.8%)であった。

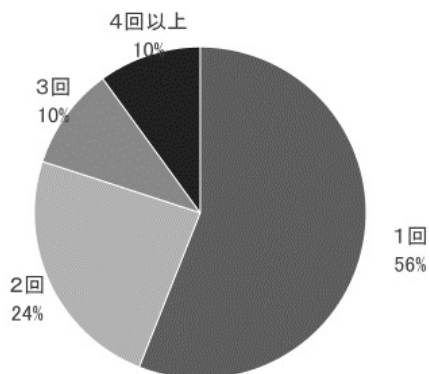


図2. 受傷回数

(2) 運動器疾患経験回数

図2に高校運動系部活動時での運動器疾患経験回数について示した。1回、28件(56.0%)、2回は12件(24.0%)、3回は5件(10.0%)、4回以上は5件(10.0%)であった。

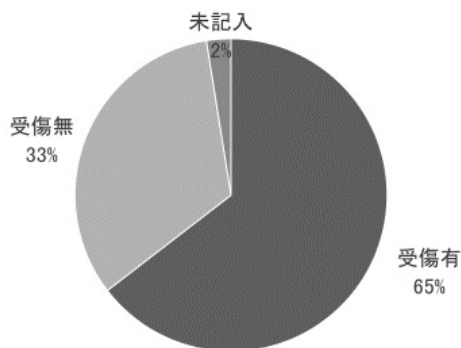


図1. 部活動における受傷経験の有無

(3) 脳震盪経験の有無

図3に高校運動系部活動時での脳震盪経験の有無について示した。脳震盪の経験ありは17件(22.7%)、脳震盪の経験なしは58件(77.3%)であった。

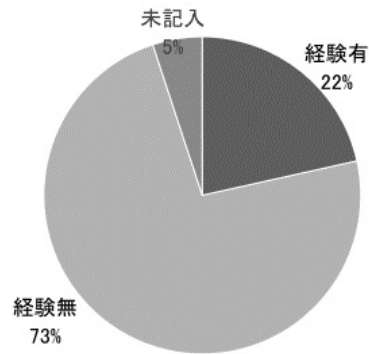


図3. 脳震盪経験の有無

(4) 医療機関受診の有無

図4に受傷時の医療機関受診の有無について示した。受診ありは46件(92.0%)、受診なしは4件(8.0%)、未記入1件(2.0%)であった。

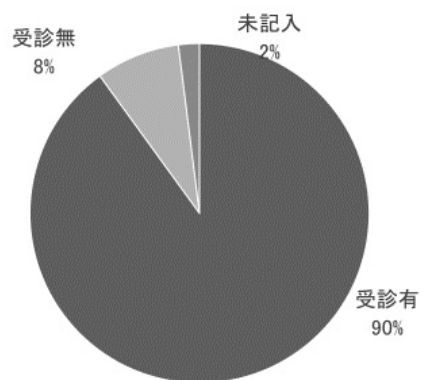


図4. 医療機関受診の有無

(5) 治療場所

図5に受傷時の治療場所について示した。医療機関のリハビリテーション科は20件(39.2%)、接骨院は42件(82.4%)、整体院は9件(17.6%)、鍼灸院は5件(9.8%)、トレーナーは2件(3.9%)、マッサージ院は3件(5.9%)であった。

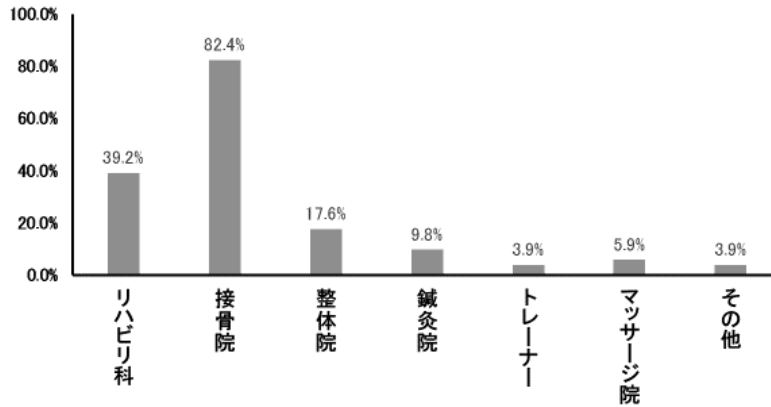


図5. 治療場所

(6) 受傷時の相談相手

図6に受傷時の相談相手について示した。顧問は35件(64.8%)、顧問外の教師は2件(3.7%)、養護教諭は3件(5.6%)、トレーナーは8件(14.8%)、先輩は16件(29.6%)、同級生は19件(35.2%)、家族は28件(51.9%)であった。

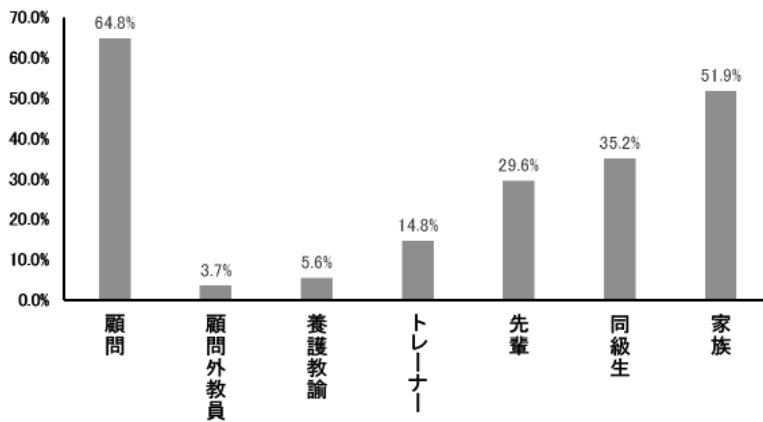


図6. 相談相手

(7) 養護教諭に相談しなかった理由

図7に養護教諭に相談しなかった理由について示した。

- 1) 養護教諭は忙しいと思ったから：とてもそう思うは19件(39.6%)、まあそう思うは17件(35.4%)、あまりそう思わないは10件(20.8%)、そして、まったくそう思わないは2件(4.2%)であった。
- 2) 保健室に行くことがなかったから：とてもそう思うは6件(12.5%)、まあそう思うは4件(8.3%)、あまりそう思わない8件(16.7%)、そして、まったくそう思わないは、30件(62.5%)であった。
- 3) 養護教諭にスポーツでの怪我は相談しづらいと思ったから：とてもそう思うは19件(39.6%)、まあそう思うは16件(33.3%)、あまりそう思わないは8件(16.7%)、そして、まったくそう思わないは5件(10.4%)であった。
- 4) 養護教諭は部活動に関わりがないと思ったから：とてもそう思うは11件(22.9%)、まあそう思うは10件(20.8%)、あまりそう思わないは14件(29.2%)、そして、まったくそう思わないは13件(27.1%)であった。
- 5) 養護教諭よりも相談するのに適任だと思った人がいたから：とてもそう思うは9件(18.8%)、まあそう思うは10件(20.8%)、あまりそう思わないは9件(18.8%)、そして、まったくそう思わないは20件(41.7%)であった。
- 6) 養護教諭に相談することは考えることがなかったから：とてもそう思うは5件(10.4%)、まあそう思うは8件(16.7%)、あまりそう思わないは6件(12.5%)、そして、まったくそう思わないは、29件(60.4%)であった。

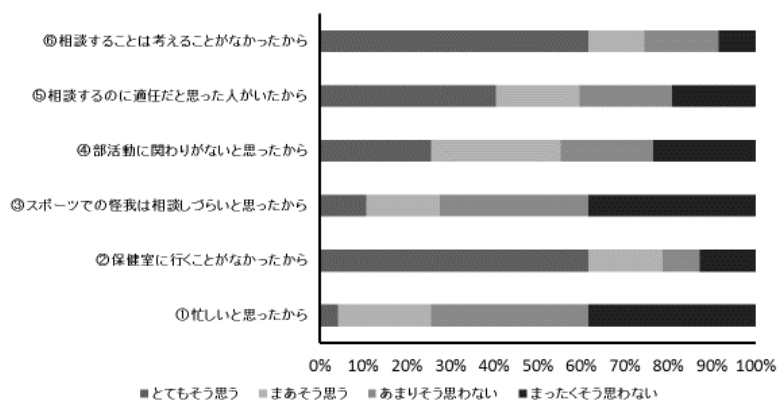


図7. 養護教諭に相談しなかった理由

5. 考察

まず、高校運動系部活動と運動器疾患について考える。本調査の結果において、高校の運動系部活動で1週間以上練習を中止する運動器疾患を受傷した者は約65%であった。また、その中でも2回以上の複数回受傷している者は、44%であり、4回以上の受傷も10%であった。文

部省（現在の文部科学省）の報告では、スポーツ障害が原因で、1週間以上スポーツ活動を中止したことがある運動部員は、中学生で12.6%、高校生で24.9%と報告されている³⁾。また、日本スポーツ振興センターの統計では、全負傷中、中学校で46.3%、高等学校で53.6%が運動系部活動時に起きているとされている⁴⁾。つまり、運動系部活動では、多くの運動器疾患の発生がみられ、複数回受傷する者も多数いることがわかる。

また、本研究では、運動系部活動時の脳震盪経験についても調査を行った。本調査においては、経験ありが、22%であった。多くはラグビー部の対象者の回答であったが、他の種目でも脳震盪の経験者は少なからず存在していた。脳振盪とは、脳への直接的、間接的な衝撃（外傷）により、脳細胞が一時的に機能を停止、その一部が損傷を受けて一過性の意識障害が起ることである。また、脳震盪を起こした後短期間で再度脳震盪を起こした場合、セカンドインパクト症候群と言われる症状を呈することがあり、脳振盪でダメージを負っている脳細胞にさらにダメージが加わり、取り返しのつかないダメージを脳にあたえてしまうことがある。致死率は50%以上、命を取り留めても、ほぼ確実に障害が残ると言われている⁶⁾。全米体育協会（NCAA）は、1,000 athlete-exposure（1人の選手が1回の練習または試合に参加すると1 athlete-exposureとなる）当たりの脳振盪発生率を集計している。ヘルメットのあるスポーツではアイスホッケー（0.27%）、アメリカンフットボール（0.25%）、ラクロス（0.19%）の順に、ヘルメットを使わないスポーツではサッカー（男子0.25%、女子0.24%）、フィールドホッケー（0.20%）、レスリング（0.20%）の順で脳振盪が多いと報告されている⁷⁾。脳震盪は、重篤な結果となることがあるので、運動系部活動においても十分な留意が必要であり、運動系部活動に関わる教師や外部の指導者および養護教諭が必要な知識を持ち、対応することが望まれる。

運動器疾患対策として重要なことは、「予防」である。スポーツ活動において運動器疾患が行った後に対処するのでは遅く、運動器疾患を起こさないための対象を考える必要がある。スポーツで起こる運動器疾患を予防するためには、指導者の力だけでは不十分な面もある。もちろん指導者が、医学的な知識を身につけ、運動器疾患の予防を行うことも必要である。その一方で、スポーツドクターや整形外科専門医、アスレティックトレーナーとチームを組んで運動器疾患の予防に重点を置いた対策をとることも必要になってくる。

しかし、学校においては、さまざまな理由で整形外科の専門医やアスレティックトレーナーとの連携を取るとは難しいこともあるので、学校医や地域の整形外科医との連携も必要となるであろう。また、山本は、部活動の顧問や養護教諭にトレーナー的知識を普及させることも必要であると指摘している⁸⁾。特に養護教諭は、学校において児童生徒の健康を守る専門職として積極的に課題に取り組む必要があると考える。

次に、上記のことも踏まえながら、運動系部活動と養護教諭の関わりについて考える。本調査の結果では養護教諭に部活動で起きた運動器疾患の相談をしたのは、5.6%であった。相談相手としなかった理由について考えてみると、運動系部活動に所属する生徒たちは、「保健室に

行くことがなく」、部活動の顧問の教員など「他に適任の相談相手がいる」、養護教諭に「相談することを考えなかった」ということが考えられる。

石川は、アスレティックトレーナーと養護教諭の役割についての類似性を指摘している⁹⁾。また、上記に述べたとおり、養護教諭にトレーナー的知識を普及することが必要であると考えられる。スポーツで起こる運動器疾患のひとつに疲労骨折がある。疲労骨折とは、微量な衝撃が継続的にかかり、骨折に至るスポーツ障害である。疲労骨折は、女性に多い運動器疾患であるが、特に、月経不順や無月経との関連が指摘されている¹⁰⁾。女子生徒の運動系部活動の顧問が男性である場合、月経などの話題は相談しづらいと考えられる。それにより、月経不順や無月経が見過ごされ、疲労骨折に至るケースも考えられる。このような時に、養護教諭が部活動に関わりを持つことが有効に働く可能性もある。

これらのことから、養護教諭の運動系部活動への関わりは未だ明確ではないが、運動器疾患の予防も含めた対応処置が運動系部活動への養護教諭の役割の一つとして考えられる。

6. 結語

高校における運動系部活動では多くの運動器疾患が発生している。応急処置や相談活動を職務とする養護教諭にとって、運動器疾患への対応が運動系部活動における役割の一つと考えられる。

引用文献

- 1) 文部科学省：第1部 心と体の健康とスポーツ 第3章 生涯にわたるスポーツライフの実現のために 第2節生涯にわたるスポーツライフの基礎としての学校教育 3 運動部活動の充実
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199801/hpad199801_2_051.html
- 2) 文部科学省：我が国の教員(前期中等教育段階)の現状と課題- 国際教員指導環境調査(TALIS)の結果概要,
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/06/30/1349189_1.pdf
- 3) 文部省(1997):運動部活動の在り方に関する調査研究報告書
- 4) 日本スポーツ振興センター(2010):課外指導における事故防止対策 調査研究報告書,
- 5) 内尾祐司, 葛尾信弘他(2008):学校における運動器検診の現状と課題. 『日本臨床スポーツ医学会誌』16(2), 196-202
- 6) 川又達朗・片山容一(2010):脳震盪とは, 『臨床スポーツ医学』, 27(3), 253-261
- 7) Kelly J, Rosenberg J(1997): Diagnosis and management of concussion in sports. *Neurology*, 48, 575-580
- 8) 山本利春(2014):学校スポーツにおける指導者のトレーナー的知識の普及の必要性一部

- 活動指導者、養護教諭、体育教員、教員志望者へのアプローチ, 『Sportsmedicine』, 163, 13-17
- 9) 石川拓次 (2012) : 養護教諭とアスレティックトレーナーの類似性についての一考察: その歴史的背景と役割を中心に, 『生活コミュニケーション学 : 鈴鹿短期大学生生活コミュニケーション学研究所年報』, 3, 13-22
- 10) 桜庭景植, 石川拓次 (2008) : 女子長距離ランナーの骨塩量および骨代謝マーカーと疲労骨折に関する研究, 『デサントスポーツ科学』, 29, 183-189

執筆者の所属と連絡先

所属 : 鈴鹿大学短期大学部 生活コミュニケーション学専攻

Email: ishikawat@suzuka-jc.ac.jp

高校部活動時における傷害の対応についての質問紙調査

以下の質問紙調査のご記入にご協力をお願い致します。この調査の結果は、統計的に処理をされ、個人が特定されることはありません。また、本研究以外で使用されることもありません。記入したくない項目については記入しなくても結構です。

設問1 あなたは、高校時代運動系の部活動に所属し、その部活動のスポーツを行っていましたか？どちらかに○印をおつけください。

1 はい ⇒ 以下の設問にお答えください。

2 いいえ ⇒ 設問はここで終わりです。ご協力ありがとうございました。

性別	男性	女性		
生年月日	19	年	月	日
身長		cm	体重	kg
出身高校				
高校時の部活動				
高校時代のチームの戦績	地区大会出場	県大会出場	地域大会出場	全国大会出場
現在行っているスポーツは？				
現在行っているスポーツをどれくらい行っていますか？	年	ヶ月		

◎ 高校時代の部活動での傷害経験についてお聞きします。

1 部活動において練習を1週間以上中止する怪我をしたことがありますか？（記号に○印をお付けください）

A. ある B. ない

2【1でA. あると答えた方のみ】 ① 高校時代に何回位練習を1週間以上中止する怪我をしましたか？（記号に○印をお付けください）

A. 1回 B. 2回 C. 3回 D. 4回以上

3 脳震盪の経験はありますか？（記号に○印をお付けください）

A. ある B. ない

4 怪我をした場合に病院(クリニック・診療所を含む)を受診しましたか？（記号に○印をお付けください）

A. した B. していない

5 怪我の治療をするときにどんな医療機関や治療院へ通いましたか？（複数回答可、記号に○印をお付けください）

A. 病院のリハビリテーション科 B. 接骨院 C. 整体(カイロプラティック) D. 鍼灸院
E. チーム専属のアスレティックトレーナー F. 按摩・マッサージ G. その他()

6 怪我について、病院受診や治療などの相談をした人はいますか？

A. いる B. いない

7【6でA. いると答えた方のみ】 どなたに相談しましたか？（複数回答可、記号に○印をお付けください）

A. 顧問の先生 B. 顧問以外の学校の先生 C. 養護教諭 D. チーム専属のアスレティックトレーナー
E. 部活動の先輩 F. 部活動の同級生 G. 家族(親、兄弟など) H. その他()

8【7でC. 養護教諭に○印を付けた方のみ】なぜ養護教諭の先生に相談したのですか？

以下のそれぞれの理由において、あなたの考えに近い回答に○印を付けてください。

	設問	とても思う	まあ思う	あまり思わない	まったく思わない
①	養護教諭は時間がありそうと思ったから	4	3	2	1
②	保健室によく行っていたから	4	3	2	1
③	養護教諭にスポーツでの怪我は相談しやすいと思ったから	4	3	2	1
④	養護教諭は部活動に関わりがあると思ったから	4	3	2	1
⑤	養護教諭は相談するのに適任だと思ったから	4	3	2	1

9【7でC. 養護教諭に○印を付けた方のみ】なぜ養護教諭の先生に相談することはなかったのですか？

以下のそれぞれの理由において、あなたの考えに近い回答に○印を付けてください。

	設問	とても思う	まあ思う	あまり思わない	まったく思わない
①	養護教諭は忙しいと思ったから	4	3	2	1
②	保健室に行くことがなかったから	4	3	2	1
③	養護教諭にスポーツでの怪我は相談しづらいと思ったから	4	3	2	1
④	養護教諭は部活動に関わりがないと思ったから	4	3	2	1
⑤	養護教諭よりも相談するのに適任だと思った人がいたから	4	3	2	1
⑥	養護教諭に相談することは考えることがなかったから	4	3	2	1

10 高校の部活動時に以下に示されたことをどれくらい行っていましたか？（記号に○印をお付けください）

- ① 練習前のストレッチを A. よくやる B. まあよくやる C. あまりやらない D. 全くやらない
 ② 練習後のストレッチを A. よくやる B. まあよくやる C. あまりやらない D. 全くやらない
 ③ 練習後のアイシングを A. よくやる B. まあよくやる C. あまりやらない D. 全くやらない
 ④ 筋力トレーニングを A. よくやる B. まあよくやる C. あまりやらない D. 全くやらない

◎ 高校時代の食事(栄養)摂取状況について

1 次の食品を1週間でのどのくらいの頻度で飲食していましたか？（記号に○印をお付けください）

	食品群	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
①	牛乳	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
②	乳製品	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
③	小魚	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
④	大豆・大豆製品	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
⑤	肉・魚介類・卵	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
⑥	色の濃い野菜	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
⑦	果物	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
⑧	清涼飲料水	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
⑨	コーヒー	A. 毎日	B. 週5～6回	C. 週3～4回	D. 週2～1回	E. 全く摂らない
⑩	スナック菓子	A. 毎日	B. 週5～7回	C. 週3～5回	D. 週2～2回	E. 全く摂らない

設問は以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

A study of the role of nursing teacher in the sports clubs at high school

Takuji Ishikawa

Abstract

This study investigates into the role of nursing teacher in sports clubs at high school. The subjects were 77 high school, college and junior college students of both sexes. (18.8±1.7 years-old) All the subjects were asked to answer questionnaires.

About 70% of the member belonged to the sports club in the high school experienced a musculoskeletal disease that was canceled activity more than a week. Most numerous consultors for musculoskeletal disease were teachers of sports club then, athletic trainers, teammates, and others. The ratio of the nursing teachers was few. The reason why few students didn't consult with the nursing teacher is that 1) Because subjects did not have to go to the nursing teacher's office. 2) Because they thought that these didn't have the relations with the nursing teachers. 3) They thought that these were suitable persons to talk than nursing teachers. Thus, the prevention of musculoskeletal diseases is one of the role of nursing teacher.

Key Words: Nursing teacher, Sports club at high school, Musculoskeletal diseases, Prevention